紹　介

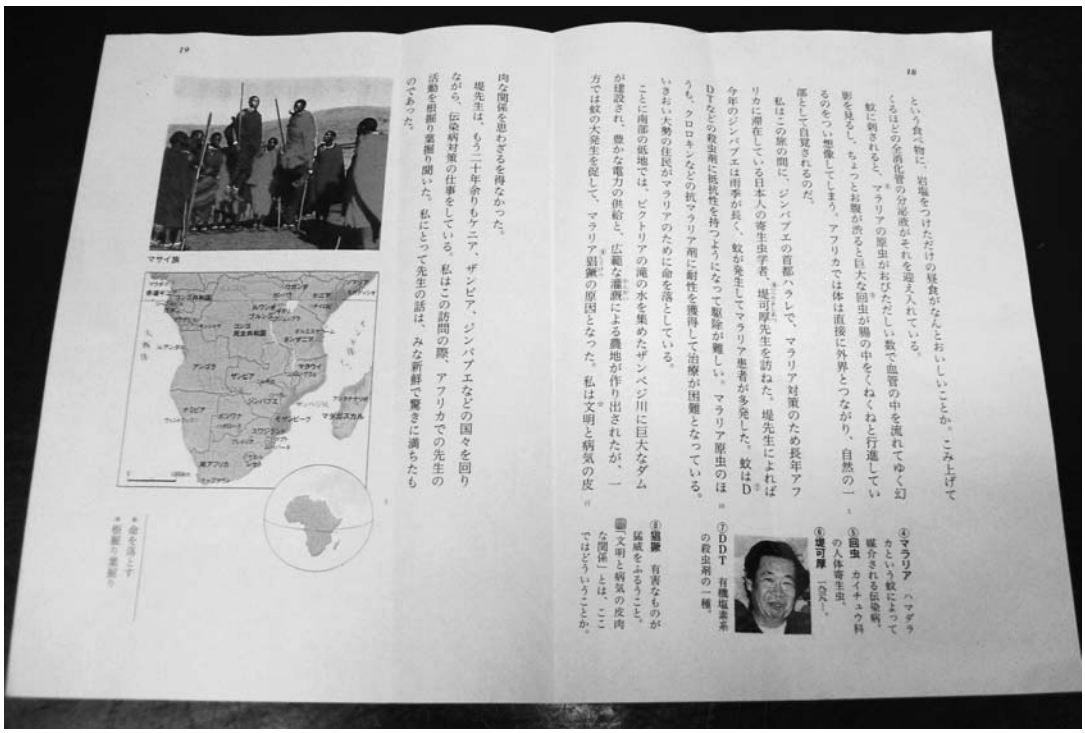
新しい世界の見方を感じるエッセイ
― 高等学校国語教科書「体の声を聞く」に獣医師の堤（つつみ） 可厚（よしあつ）先生登場 ―

比留間一男†（比留間獣医科医院院長）

文筆家として知られ「免疫の意味論」など沢山の著作がある多田富雄東大名誉教授は，1971年に抑制T細胞を発見するなど，免疫学者として優れた業績を残した．功績により野口英世記念医学賞や朝日賞，小林秀雄賞，さらに文化功労者，瑞宝重光章を受賞していることでも知られる．

現在，高等学校の国語教育は，「国語表現Ⅰ」と「国語総合」のどちらか1科目が必履修科目であり，後者は現代文・表現・古文・漢文の4編で構成されている．「高等学校標準国語総合」（第一学習社）の現代文編は，随想，小説，評論，詩，短歌と俳句から成り立っている．随想分野で新しい世界の見方を感じることができるやさしいエッセイの一編として，多田富雄著「独酌余滴」（朝日新聞社，1999）にある「体の声を聞く」（「銀行倶楽部」，1997）が引用されている．

著者がアフリカの炎天下，水を飲んで渇く体内を駆け下りる水しぶきや水の吸収感，空腹時に胃の叫ぶ「体の声」と，マサイ族が語る体と自然のつながりで，文明の陰で忘れがちな「つながっているという実感」の大切さを伝えている．著者がアフリカ大陸南部を旅行し，ジンバブエの首都ハラレで，マラリア対策のため長年アフリカに滞在している堤 可厚先生を訪ね，聞き取りをした様子を詳細に記している．ここではアフリカの地図や民族写真とともに日本人の寄生虫学者として堤先生の顔写真を入れ次のように記している（図）．



という食べ物に、岩塩をつけただけの昼食がなんとおいしいことか。こみ上げてくるほどの全酒化酵素の分泌液がそれを迎え入れている。

蚊に刺されると、マラリアの原虫がおびただしい数で血管の中を流れてゆく幻影を見るし、ちょっとお腹が渋ると巨大な回虫が胃の中をくねくねと行進している。

部として自覚されるのだ。

私はこの旅の間に、ジンバブエの首都ハラレで、マラリア対策のため長年アフリカに滞在している日本人の寄生虫学者、堤可厚先生を訪ねた。堤先生によれば今年のジンバブエは雨季が長く、蚊が発生してマラリア患者が多発した。蚊はDDTなどの殺虫剤に抵抗性を持つようになって駆除が難しい。マラリア原虫のほうも、クロロキンなどの抗マラリア剤に耐性を獲得して治療が困難となっている。

いきおい大勢の住民がマラリアのために命を落としている。

ことに南部の低地では、ビクトリアの滝の水を集めたザンベジ川に巨大なダムが建設され、豊かな電力の供給と、広範な灌漑による農地が作り出されたが、一方では蚊の大発生を促して、マラリア罹患の原因となった。私は文明と病気の皮肉な関係を思わざるを得なかった。

堤先生は、もう二十年余りもケニア、ザンビア、ジンバブエなどの国々を回りながら、伝染病対策の仕事をしている。私はこの訪問の際、アフリカでの先生の活動を根掘り葉掘り聞いた。私にとって先生の話は、みな新鮮で驚きに満ちたものであった。

マサイ族

④マラリア　ハマダラカという蚊によって媒介される伝染病。

⑤回虫　カイチュウ科の人体寄生虫。

⑥堤可厚　一九八一。

⑦DDT　有機塩素系の殺虫剤の一種。

⑧猛威　有害なものが猛威をふるうこと。

⑨「文明と病気の皮肉な関係」とは、ここではどういうことか。

図　右頁：蚊の発生によるマラリア発生と対策の説明文，欄外に堤 可厚先生の顔写真と専門用語の説明
左頁：堤先生の活動の地域を示すアフリカ地図とマサイ族の写真

† 連絡責任者：比留間一男（比留間獣医科医院）
〒358-0042　入間市大字上谷ヶ貫601　☎04-2936-0432　FAX 04-2936-0401
E-mail : khiruma@bronze.ocn.ne.jp

堤先生は，もう20年あまりもケニア，ザンビア，ジンバブエなどの国々を回りながら，伝染病対策の仕事をしている．私はこの訪問の際アフリカでの先生の活動を根掘り葉掘り聞いた．私にとって先生の話は，みな新鮮で驚きに満ちたものであった．堤先生は，ケニアのマサイ族と暮らしたときのことを話してくれた．

―部　分　略―

彼らがようやく心を開いて先生を迎え入れてくれるようになったとき，先生は部族の長老に次のように質問した．

「人間にとっていちばん大切なものは何だと思うか.」

「それは胃袋だ．胃袋がだめになれば人間は死ぬ．その証拠に，人間が死ぬときには食べ物が入らなくなるだろう．また，森で死んだ動物の腹を切り開いてみると胃袋に必ず血が入っている．だから胃袋がいちばん大事なのだ.」

また，目の高さについて

「目がここにあるのは，立って遠くを眺めたとき，一日で歩き着ける地点を見るためなのだ．誰でも，立って自分の目の届く所までは歩いてゆくことができる.」

人による身長の違いを抗弁すると

「背の高い人は脚も長い．見える所も遠いが，歩ける距離も長くなる．そんなこともわからないのか，その齢をして.」と．

アフリカの過酷な自然の中では，体の部分それぞれが具体的な役割を主張している．ここでは，文明国ではとうに忘れられてしまった「体のナマの声を聞く」ことができる．

また，この編の評論の項で日高敏隆京大名誉教授の「人間はどこまで動物か」が引用され，「物事を比べることの難しさや複雑さ」を学習する内容になっている．

旅行先のアフリカで堤先生と出会い，現地での聞き取りが著者の胸を打ちこのエッセイが生まれた．堤 可厚先生は現在，杏林大学医学部で感染症学講座の客員教授の任にある．多忙な中，アフリカ支援や東北被災地の医療支援に取り組んでいる．また，茨城県で鉾田市大使のほか，地方獣医師会の研修講師としても活躍されている．最近，戴いた手紙に，似顔絵と一緒に書かれていた言葉を付記する．

Man’s life is like going a long way with a heavy load on. You must not hurry.